

---

## ロシア史研ニューズレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ  
No. 79 *September 2010*

---

### ロシア史研究会 2010年度大会特集号

立教大学池袋キャンパスによろこぞ!



立教大学池袋キャンパス14号館（大会会場）/立教大学広報課提供

すでにお知らせしたように、ロシア史研究会 2010年度の大会は、10月16日(土)、17日(日)の両日に立教大学（池袋キャンパス）で開催されます。多くの会員の方の参加をお待ちしています。

【立教大学へのアクセス】JR 山手線・埼京線・高崎線・東北本線・東武東上線・西武池袋線・地下鉄丸ノ内線・有楽町線「池袋駅」下車。西口より徒歩約7分。なお、立教

大学の Web ページ (<http://www.rikkyo.ac.jp/access/pmap/ikebukuro.html>) も参照してください。

## ロシア史研究会 2010 年大会プログラム

日時：2010 年 10 月 16 日（土曜日）・17 日（日曜日）

場所：立教大学池袋キャンパス 14 号館（〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1）  
同封した別紙のキャンパスマップも参照して下さい。同マップは、  
<http://www.rikkyo.ac.jp/access/ikebukuro/campusmap/> からダウンロード出来ます。

10 月 16 日（土曜日）14 号館 4 階 D401 教室および 5 階 D501 教室

	A 会場	B 会場
10:00 ～10:55	自由論題 1 渡辺大作「ラッフィの小説における「アルメニア」と「ロシア」	自由論題 4 乾雅幸「ロシア革命と「ロシアのドイツ人」——ウクライナのドイツ人、シベリアのドイツ人の動向を中心に」
11:00 ～11:55	自由論題 2 田中まさき「イヴァン・プイリエフの幻の『雷帝』プロジェクト」	自由論題 5 鶴見太郎「帝政末期のロシア・シオニズムにおける反本質主義——社会学的思考がパレスチナに向かうとき」
12:00 ～12:55	自由論題 3 神長英輔「コンブの道——サハリン島と中華世界」	自由論題 6 辻義昌「ロシア第二革命期における労働運動の盛衰」
14:00 ～17:00	共通論題 1（D401 教室） 「ロシアと東アジア世界——19 世紀半ばから 20 世紀初頭の展開」 報告：和田春樹／ディヴィッド・ウルフ／中見立夫 コメンテータ：ヤロスラフ・シュラトフ／岡本隆司	
17:10 ～18:00	総会 （D401 教室）	
18:00 ～20:00	懇親会 （第一食堂 1 階）	

10 月 17 日（日曜日）14 号館 4 階 D401 教室

10:00 ～12:00	パネル 「「共産主義建設期」のソ連における国家と社会」 報告：松戸清裕／松井康浩／河本和子      コメンテータ：中地美枝
-----------------	--

13:30 ~16:30	共通論題 2 「啓蒙と専制」 報告：橋本伸也／鈴木直志／鳥山祐介      コメンテータ：土肥恒之
-----------------	---

10月16日(土曜日)

<自由論題報告>

**A会場(14号館D401教室)**

自由論題1 (10時00分~10時55分)

渡辺大作(東京大学大学院)「ラッフィの小説における「アルメニア」と「ロシア」  
コメント:吉村貴之(東京外国語大学・非常勤研究員)

自由論題2 (11時00分~11時55分)

田中まさき(新潟県立大学・非)「イヴァン・プイリエフの幻の『雷帝』プロジェクト」  
コメント:塩川伸明(東京大学)

自由論題3 (12時00分~12時55分)

神長英輔(東京大学・非常勤研究員)「コンブの道—サハリン島と中華世界」  
コメント:森永貴子(立命館大学)

**B会場(14号館D501教室)**

自由論題4 (10時00分~10時55分)

乾雅幸(関西大学大学院)「ロシア革命と「ロシアのドイツ人」—ウクライナのドイツ人、シベリアのドイツ人の動向を中心に」  
コメント:半谷史郎(愛知県立大学・非)

自由論題5 (11時00分~11時55分)

鶴見太郎(日本学術振興会特別研究員)「帝政末期のロシア・シオニズムにおける反本質主義—社会的思考がパレスチナに向かうとき」  
コメント:竹中浩(大阪大学)

自由論題6 (12時00分~12時55分)

辻義昌(早稲田大学)「ロシア第二革命期における労働運動の盛衰」  
コメント:池田嘉郎(東京理科大学)

<共通論題1> (14時00分~17時00分) **14号館D401教室**

「ロシアと東アジア世界—19世紀半ばから20世紀初頭の展開」

報告:和田春樹(東京大学名誉教授)

ディヴィッド・ウルフ(北海道大学) “Russo-Japanese Relations in the 19th Century Revisited”

中見立夫(東京外国語大学)「19世紀半ばから20世紀初頭における“東アジア”とロシア帝国—地域概念と国際関係」

コメンテータ: ヤロスラフ・シュラトフ(日本学術振興会特別研究員)  
岡本隆司(京都府立大学)

司会:横手慎二(慶應義塾大学)

<総会> 17時10分~18時00分 14号館D401教室

<懇親会> 18時00分~20時00分 第一食堂1階

10月17日(日曜日) **14号館D401教室**

<パネル> (10時00分~12時00分)

「「共産主義建設期」のソ連における国家と社会」

松戸清裕(北海学園大学)「1950—1960年代のソ連における「犯罪との闘い」—国家と社会の「協働」に注目して」

河本和子(早稲田大学)「同志裁判所にみるソヴェト国家・社会・個人」

松井康浩(九州大学)「後期ソヴィエト体制下を生きる市民の「主体性(agency)」—ライフストーリー文書を手がかりに」

コメンテータ：中地美枝（北海道大学）

司会：宇山智彦（北海道大学）

## ＜共通論題 2＞ （13 時 30 分～16 時 30 分）

「啓蒙と専制」

報告：

橋本伸也（関西学院大学）「啓蒙と専制—ロシアにおける大学の社会文化史からの展開」

鈴木直志（桐蔭横浜大学）「ドイツにおける「啓蒙」と「専制」—啓蒙絶対主義の歴史的  
的位置について」

鳥山祐介（千葉大学）「18 世紀末-19 世紀初頭のロシアにおける風景表象の様式—視覚  
化される「啓蒙」と「専制」

コメンテータ：土肥恒之（一橋大学名誉教授）

司会：巽由樹子（日本学術振興会特別研究員）

## 自由論題 1 渡辺大作（東京大学大学院）「ラフフィの小説における「アルメニア」と「ロシア」

アルメニア人居住地域がロシア帝国とオスマン帝国という 2 つの国家によって二分されていた 19 世紀後半、ロシア帝国治下のアルメニア人のアイデンティティがどのようなものであり、彼らが宗主国ロシアに対していかなる感情を抱いていたのかについて、19 世紀東アルメニア文学最大の小説家とされるラフフィ（Raffi, 1835-1888）の作品を通して明らかにする。ラフフィはチフリスを拠点に執筆活動を行い、彼の作品は主に同地で発行されていたアルメニア系雑誌『勤労者』（*Mushak*, 1872-1920）に連載され、当時のロシア帝国のアルメニア人識字層の間で広く読まれていた。この意味では、彼の作品が当時のアルメニア人社会に与えた影響は無視できず、彼の作品を取り上げる意義は大きいと言える。

19 世紀ロシア帝国のアルメニア知識人についての研究は、これまで研究者の関心がナロードニキと交流のあったミカエル・ナルバンディアン（Mik'ayel Nalbandyan, 1829-1866）に集中する傾向が強い。そして、ソヴィエト期には、当時の政治的制約から彼をロシア帝国の革命運動とアルメニア民族運動を結びつけたロシアとアルメニアの「友好の架け橋」と位置づける研究も存在する。しかしながら、彼の思想に当時のロシアのアルメニア人の思想を集約できるとは必ずしも言い切れない。また、ラフフィについても、アルメニアにおいては彼の死後から現在に至るまで数多くの研究が存在するものの、彼の文学史上の革新性を強調するものや、彼をアルメニア民族運動のイデオログとして無条件に賞賛するものがほとんどであり、客観性に欠ける。このようなことから、本報告では、ラフフィという作家の新たな側面に光をあてると同時に、我が国では全く知られていない彼の作品を取り上げる意味で一定の意義があると思われる。

具体的には、ラフフィの小説の中から、1877-1878 年のロシア・オスマン戦争前後のオスマン帝国領東部アナトリアのアルメニア人農民の惨状を描いた『狂人』（*Khentë*, 1881）、ビザンツ帝国とササン朝の狭間で翻弄される 5 世紀のアルメニアを描くことで、暗にロシアとオスマン帝国を批判したとされる短編小説『アルメニア人のプロハエレシウス』（*Paryur haykazn*, 1883）などを取り上げる。そして、これらの作品の中で描かれる「アルメニア」や「アルメニア人」像、アルメニア（人）と「他者」との関係を抽出し、このような描写の要因を当時のアルメニアを取り巻く国際情勢など執筆時の時代背景から論じたい。

## 自由論題 2 田中まさき（新潟県立大学・非）「イヴァン・パイリエフの幻の『雷帝』プロジェクト」

イヴァン・アレクサンドロヴィッチ・パイリエフ（1901-1968）は、ソ連時代のロシア映画を代表する監督である。スターリン時代には、数々のミュージカル・コメディを手がけ、人気と実力を認められていた。その最たるものが、農村ミュージカル・コメディの傑作『クバン・コサック』（1949 年）である。

スターリン時代のパイリエフの作品は後年になって、ソヴィエト社会の現実を糊塗し、大衆を幻惑した『ラキロフカ』であるとして批判の対象となった。しかしながら、映画芸術の中で

描写された世界が全くの虚構であるとしても、それと同時に、そこには当時に特有の事物や理念といったものが映し出されているのであり、情報源として大変興味深い。

報告申請者はこれまでもプイリエフによる一連のミュージカル作品を取り上げ、論文を執筆してきた。ここでは、プイリエフの表現の独自性を明らかにするために、同時代の娯楽映画の巨匠Г.アレクサンドロフの諸作品との比較、またС.エイゼンシュテインの『古いものと新しいもの』(1927年)との比較を通じて、分析を行った。また報告申請者は、2007年にロシア史研究会大会で報告を行ったことがある。ここでは、30年代から大祖国戦争前夜までに製作された諸作品を比較することで、物語の舞台となる農村像について、どのような変化がみられるかについて論考した。

しかしプイリエフといえ、日本では晩年のドストエフスキーの映画化作品によって、より認知されているように、その作品のジャンルはミュージカル・コメディーのみにとどまらない。さらに、実現しなかったプロジェクトを視野に入れると、彼の創作意欲が多岐に渡っていたことがわかる。

本報告では、プイリエフ版『イヴァン雷帝』のプロジェクトについて分析する。これは『クバン・コサック』の成功の後1951年に企図され、製作準備が進められていたが、スターリンの死後53年に実現しないまま終わったものである。史料としては、РГАЛИにあるプイリエフのフォンドに収められている『雷帝』シナリオの準備稿を参照し、プイリエフが描こうとした幻の「新しい雷帝」像を明らかにする。

### 自由論題3 神長英輔（東京大学・非常勤研究員）「コンブの道——サハリン島と中華世界」

コンブの産地は北の海だ。しかし、日本列島でも中華世界でもコンブは北の地方に限られず、広く食べられている。日本列島なら沖縄、中華世界なら広州や香港などの華南地域でコンブはありふれた食材だ。日本列島で食べられるコンブの多くは北海道で生産される。コンブは北海道から全国各地に運ばれる。こうしたコンブの道の由来は古い。ロシア極東にも当然、コンブはある。例えば、サハリン島の南部沿岸でコンブはふつうに見られる。サハリン島のロシア人はコンブを食べる。ただ、日本や中国のようにだしを取ることはないし、コンブが特に好まれているわけでもない。

19世紀の後半、このサハリン島を起点とするコンブの道があった。この道はサハリン島からウラジオストク、さらにそこから中国東北部を経て山東半島や上海へ続いていた。ロシア人がサハリン島の本格的な開発に着手したのは19世紀後半だ。当時の島の主要な産業は漁業だった。季節的に島を訪れる日本人労働者の手で生産された生産物の大半は日本列島に運び出されていた。しかし、例外があった。それがコンブだ。

島のコンブ生産を一手に引き受けていたのはセミョーノフ商会だ。セミョーノフとは当時のロシア極東でよく知られた大商人だ。このセミョーノフ商会はサハリン島の西海岸でコンブ生産をおこなった。セミョーノフ商会のコンブ漁を請け負っていたのは季節的に来島する華人や朝鮮人の労働者だった。セミョーノフ商会は彼らに道具を貸与し、生産物を買上げていた。同商会は労働者の旅費も負担していた。ウラジオストクでの人集めに際しては中国東北部の商人が関わっていたようだ。

中国市場においてサハリン島のコンブは日本産（北海道産）のコンブと競合した。ただ、商権は華人商人の手にあった。函館の日本人海産商と同様にセミョーノフ商会も上海での直接販売を目指した。サハリン島のコンブは沿海地方産のコンブとあわせて清に輸出された。両者の割合は明らかでないが、日露戦争後に輸出額が激減したところを見ると、サハリン島産が多かったようだ。当時の状況を伝える情報としては断片的なものが多いが、概要を知るには差し支えない。報告ではできるだけ具体的な情報を提供するよう努めたい。

### 自由論題4 乾雅幸（関西大学大学院）「ロシア革命と「ロシアのドイツ人」—ウクライナのドイツ人、シベリアのドイツ人の動向を中心に」

「ロシアのドイツ人」とは、ヴォルガ・ドイツ人やバルト・ドイツ人など、入植あるいはロシアによる併合などでロシアに帰属し、居住するドイツ人の総称である。彼らはその歴史の中でいくつかの曲折点を経ることになったが、なかでも大きな曲折点の一つとなったのが、第一次世界大戦であった。というのも、この第一次世界大戦以降、帝国政府は彼らを敵国出身の民

族とみなし、最終的には帝国全土のドイツ人を対象に、所有する土地の接収とシベリアへの追放を行おうとしたからである。ただ、彼らにとって第一次世界大戦が大きな意味をもったのは、それだけではない。こうした帝国政府の政策に反対すべく、各地のドイツ人がその地域ごとで結束する動きを見せ始めたのである。1917年に始まる「ロシアのドイツ人」の民族運動は、他の諸民族と同様に二月革命の勃発が大きな契機となったが、その背景には以上のような経過があったことも見逃せない。

このロシア革命期における「ロシアのドイツ人」の民族運動で最大の成果を得たのが、1918年10月に自治州を成立させたヴォルガ・ドイツ人である。このヴォルガ・ドイツ人自治州の成立についてはかつて筆者も一文を発表し、自治州はヴォルガ・ドイツ人の民族運動とソヴィエト政権の国際主義への志向とが重なりあって成立したことを明らかにした。しかし、ヴォルガ・ドイツ人以外の「ロシアのドイツ人」が革命期にどのような運動を展開したのかはあまり知られていない。事実、ヴォルガ・ドイツ人は3月末に本格的に運動を開始して4月末に第1回ヴォルガ・ドイツ人大会を開催したが、すでに3月中頃にはオデッサで、また4月下旬にはモスクワで、それぞれドイツ人たちによる集会が開かれていたのである。

本報告では、こうしたヴォルガ・ドイツ人以外の「ロシアのドイツ人」に目を向け、彼らのロシア革命期における動向を、ウクライナのドイツ人とシベリアのドイツ人を取り上げて、たどってみたい。これら二地域のドイツ人に着目する理由は、どちらも革命・内戦を経る中で、ヴォルガ・ドイツ人のような自治州ではないものの、事実上地区または地域単位で民族自治が認められていたからである。この事実上の民族自治と彼らの革命・内戦期の動向とはどのように関わりあったのか。これが本報告の問題関心である。また本報告では、これら二地域の事例をヴォルガ・ドイツ人の事例と突き合わせることで、三つの事例の共通点と差異を浮かび上がらせるとともに、ロシア革命期における「ロシアのドイツ人」の動向の全体像を大まかながら得ることを試みたい。なお、本報告では1917年から1921年までの時期を主に取り上げるが、内容によっては1920年代半ばまでも含めることにする。

#### 自由論題 5 鶴見太郎（日本学術振興会特別研究員）「帝政末期のロシア・シオニズムにおける反本質主義—社会学的思考がパレスチナに向かうとき」

ナショナリズム、とりわけ、ロシア・東欧地域に広範に見られるとされるエスニック・ナショナリズムは、一般に本質主義的思考と結び付いているとされる。19世紀終わりに生まれたシオニズムも、参加者を領域的に限定するのではなく、ユダヤ人という生まれで限定している点で、エスニック・ナショナリズムに分類される。ところが、ロシア・シオニズムの（準）機関紙（『エヴレイスカヤ・ジズニ』や『ラスヴェト』）を紐解いてみると、そこには「ユダヤ」の本質についての議論がきわめて少ないばかりか、本質を規定することに否定的な見解すら散見されるのである。

本報告では、報告者がすでに発表しているこうした反本質主義的姿勢を生んだ2つの要因を概観したのち、そうした思考がパレスチナへと向かった回路を追っていく。

まず、要因について、その1つ目は、ユダヤ人をめぐる社会経済構造の変動に端を発した認識の変化が挙げられる。ポーランド＝リトアニア王国以来、ユダヤ人は都市と農村の仲介や手工業といった独自の役割で社会経済における一定の位置を占めていた。資本主義化・工業化はこのユダヤ人の機能に打撃を与え、多くがプロレタリア化していったばかりか、ユダヤ人であることが社会経済上の不利益を生むこととなった。シオニストになったユダヤ知識人は、これがユダヤ人を同化に導くと考えた。ここから、単に時代に応じたユダヤ文化を創設するのではユダヤ大衆を引き付けることはできず、確固としたユダヤ経済——そのためには領土が必要とされた——を立ち上げることが必要とされた。こうした認識の背景には、民族が形而上学的ではなく社会経済的・社会学的な諸要因によって保持されているとする認識があった。

要因の2つ目としては、それまでのユダヤ人の歴史・社会的な行動パターンに対する反発が挙げられる。シオニストが見るところ、ユダヤ人はそれまで、とりわけシュタドランと呼ばれるユダヤ人名望家を中心に、時の権力者におもねる形で、社会における地位を認められてきた。また、ドイツを中心に始まったユダヤ啓蒙主義（ハスカラー）においては、「ユダヤ」を「宗教」と定義し、その本質を、ユダヤ人が居住国民であることと矛盾しない形で規定しようとしていた。つまり、ユダヤ人は存在するために非ユダヤ人にとって有用で価値がなければならなかつ



たのである。これに対してシオニストは、民族はその存在価値によって測られるのではなく、単に存在しているという事実によって、存在することを目的に、存在する権利を持つと考えた。このことが、本質を規定することに対する嫌悪感に繋がったのである。

本報告では、彼らロシア・シオニストのこうした思考回路が、ユダヤ人が一部であれパレスチナに「帰還」しなければならないとする観念とどのように繋がっていたのかを明らかにする。そこで中心となるのも、民族が本質ではなく社会的に形成されるという彼らのテーゼである。

#### 自由論題 6 辻義昌（早稲田大学）「ロシア第二革命期における労働運動の盛衰」

私は 1970 年代に「労働運動は党組織とは別個に独自の主体性と論理を持っていたはずだ」という仮定のもとに 1917 年 10 月までの革命的労働運動を研究した。しかし、それは 1950 年代的制約を 1920 年代的問題意識に戻すという程度のものでしかなく、資料そのものの持つ先験的限界を超えることが出来なかった。

近年の労働運動史資料集の相次ぐ刊行、ならびに文書館の公開は自立した存在としての労働運動の姿をかなり明確に示すことになった。

第二革命期における労働運動の概略は以下のようである。1917 年の第二革命勃発の口火を切った戦時産業委員会労働者グループの運動は、国会や全国自治体連合などを主導する自由主義者の最高指令部たる「政治的フリーメーソン」という秘密結社のいわば下部組織の運動であった。それゆえ、帝政を崩壊させたのがまさにこの団体であったがゆえに、労働者代表会議（ソヴェット）と新政府とは同じ傘の下で蜜月的に協調することができた。帝政崩壊後の労働運動のさまざまな獲得物（労働組合の結成、8 時間労働日、労働省の設置、労働裁判所の設立など）はカデット党左派の容認する枠内での、つまり協調主義の産物であった。

しかし、17 年 8 月頃になると、フリーメーソンの指導性が弱まり、入閣している労働大臣を頂点とする労働運動の指導部に下部リーダーが不満を募らせ、9 月には労働運動にはアパシー状況と共に、指導性の不在が顕著になった。この空白状況のなかで一部の兵士の蜂起で敢行された十月の政権奪取とその直後に出たレーニンの布告は一般の兵士だけでなく、労働者一般からも熱烈に支持され、11 月・12 月は協調派社会主義者の信用喪失、ソヴェットでの議席の大量喪失、憲法制定会議選挙での惨敗をもたらした。

しかし、新政府は幻想を煽っただけだった。国民生活の窮乏とドイツ軍侵攻の恐怖は昂進する一方であり、1918 年 3 月レーニン政府が首都から夜逃げするに及んで、新政府の信用は地に落ち権威を失った。そのなかで旧来の右派的労働運動の指導者と幻滅した元左派とが「労働者代表者会議」を結成し、第 2 のソヴェット運動を成功させた。しかし、1905 年の第一次ソヴェットと同じく、1918 年 7 月に弾圧され、壊滅してしまう。その直後に秘密裏に開かれた全ロシア労働者大会は左翼エスエルの反乱と同様、一般国民の無関心と大多数の兵士部隊の中立状態の下、レット人狙撃部隊とチェーカーの急襲に会い、止めを刺されてしまう。このとき以来、ロシアでは合法的な労働運動は姿を消した。労働運動が消えたとき、非政府系マスメディアも非合法化され、帝政時代でも考えられない野蛮な強圧体制へと歴史が大きく退行することになった。

#### 共通論題 1 「ロシアと東アジア世界—19 世紀半ばから 20 世紀初頭の展開」

(1) 和田春樹（東京大学名誉教授）

(2) ディヴィッド・ウルフ（北海道大学）“Russo-Japanese Relations in the 19th Century Revisited”

Russo-Japanese bilateral relations in the 19th century have often been seen in hindsight, leading inexorably to the War of Meiji 37-38. Here I would like to present other perspectives, placing these relations in their local, regional and global contexts. I myself am no expert on the 19<sup>th</sup> century, so have no original research to offer to this distinguished audience.

A global context will examine the place of Russia and Japan in an age of empires for such was the 19<sup>th</sup> century. Regional analysis will focus on the various and changing conceptions of region, both imagined and created by Russia and Japan, reflecting diverse geopolitical hopes and fears. Local analysis will privilege the mixed experiences of contact, the “small” events available to regional, national and global hi(story) tellers. It is hoped that this presentation will help our members to teach this period as open-ended, not necessarily leading to the dark



passage of the 20<sup>th</sup> century with its distinctly negative record of Russo-Japanese relations, regardless of the lens chosen.

(3) 中見立夫 (東京外国語大学) 「19 世紀半ばから 20 世紀初頭における“東アジア”とロシア帝国—地域概念と国際関係」

「ロシアと東アジア世界—19 世紀半ばから 20 世紀初頭の展開」と題される、この部会では、様々な角度から、ロシア帝国と東アジア地域世界との接触と交流、摩擦と衝突が論じられるであろう。ここでいう「東アジア」とは、日本、中国、朝鮮をさすのであろうが、だが、ロシア側からみれば、「東アジア」という言葉で、この地域を認識することは稀であり、地理的概念としては「極東」としてとらえられていた。他方、日本では「東亜」という語で、ヨーロッパ語から「東アジア」という地域概念は受容された。日本からみれば、中国 (当時はむしろ「清国」ないしは「支那」とよばれた)、朝鮮と個別に論ずるのではなく、あえて「東亜」ということばを使おうとするとき、ヨーロッパ列強、とくにロシア帝国の進出に対する、東アジアの連帯というニュアンスがこめられていた。その典型的な用例が「東亜同文」、あるいは政治組織としては「東亜同文会」であろう。

日清戦争よりまえの時期においては、ロシア帝国と朝鮮半島との接触はすくなく、ロシアにとって、日本そして清朝との関係は、それぞれ個別なものとしてとらえられていた。結局のところ、ロシア帝国、日本がそれぞれ朝鮮半島に対する影響力拡大をめざしたとき、中国、朝鮮、日本の政治・軍事情勢は連動するようになり、その焦点ははじめ、朝鮮半島、ついで 20 世紀初頭においては、中国東北地方 (「満洲」) そしてモンゴルとなる。ちなみに「満洲」という地域名を創出したのは江戸期の日本人であったが、はじめは沿海州地方をおもにさしていた。他方、ロシア人たちは、「タルタリア」という名で、満洲族、モンゴル族の生活空間を呼んでいた。やがてロシア帝国のシベリア統治が強化されると同時に、「タルタリア」は消え、「マンチュリア」、「モンゴリア」が登場する。地域をどう設定し認識するか、それは常に、そのときの国際情勢と連動している。

**パネル：「共産主義建設期」のソ連における国家と社会」**

**パネルの趣旨：**ソ連における政権と人々は、操作する主体と操作される客体として描かれることがあるが、両者の関係はそれほど単純ではなかった。特に第 21 回党大会 (1959 年) において「共産主義建設期」に入ることを宣言したのちの政権は、「共産主義社会における自治」の理念に基づき、人々を政策形成と実施に引き入れようとし、その自主性に期待していた。他方で社会の側にも、政権の働きかけに積極的に反応した人々も少なからずいた。ただしその反応は、必ずしも政権の意図に同調したものとは限らず、この意味で政権は、意図したほどに社会を掌握できていたわけではなかった。本パネルの目的は、政権が人々に対していかに働きかけ、人々はどうのように反応したかという相互関係に注目することによって、「共産主義建設期」のソ連における国家と社会の在り方を浮かび上がらせることにある。

(1) 松戸清裕 (北海学園大学) 「1950—1960 年代のソ連における「犯罪との闘い」— 国家と社会の「協働」に注目して—」

第 21 回党大会は、ソ連が「共産主義建設期」に入ると宣言し、「共産主義社会における自治」を将来的に実現すべく、общественность (便宜的に「社会」としておく) に依拠する必要性を強調した。「社会」への依拠は、行政・経済・文化その他の広範な分野で唱えられたが、報告では、社会主義的適法性の遵守と社会秩序の維持、より具体的には「犯罪との闘い」に注目する。国家権力が最も直接的に行使される分野であると同時に、地域社会、住民、勤労集団にとって身近かつ重大な意味をもつ分野であり、そしてまた、およそあらゆる国において国家と社会がなんらかの関わりをもつ分野であると考えためである。

「共産主義建設」に伴い「犯罪の究極的な根絶」が目標として掲げられ、この目標は、第 22 回党大会 (1961 年) で採択された党綱領にも盛り込まれたが、その一方で、現状では犯罪・違法行為が少なからずあることも認められ、犯罪・違法行為の防止と社会秩序の維持への取り組みを強化すべきことが強調された。こうして展開されていった「犯罪との闘い」における「社会」の役割としては、犯罪・違法行為に関する警告の発信、人民自警団や同志裁判所といった社会団体の活動、軽微な罪を犯した者の勤労集団による保護観察、職場や公共の場における犯罪やあるまじき行為を許さぬ雰囲気作りなどが重要だとされた。こうした政権側の働き

かけによって人々が皆その役割を積極的に担おうとしたわけではなかったが、積極的に取り組む人々も少なからず存在した。

政権が看過できなかったことは、積極的に取り組む人々が存在したにもかかわらず「犯罪との闘い」における「社会」の役割はなお満足できるものではなかったということであり、その理由は「社会」の側だけにあったのではないということであった。「社会」の側の取り組み不足、力不足もあったが、政権は、ソヴェト機関や民警・検察機関に「社会」とのあるべき「協働」関係の創出に取り組むよう徹底させることさえできなかったのである。

## (2) 河本和子（早稲田大学）「同志裁判所にみるソヴェト国家・社会・個人」

ソ連における民主主義は自由主義を含んでおらず、したがってソヴェト政治体制において、公私の区分は少なくとも明瞭にはあらわれない。とりわけフルシチョフ期には、国家の活動を担うために社会団体の活動範囲を拡大させるという、公私の区分を結果として無くしていく方針が採られた。この方針は、多くの人々の国家運営への参加を呼びかけただけでなく、共産主義社会にふさわしい人間づくりのために、人々の日常生活に対する様々な関与をもたらした。こうした政策の帰結のひとつとして、教育という名の下に個人の自由が広範に制限される可能性が考えられる。

とはいえ、個々人に留保された自己決定の範囲がなかったわけではない。同時期の家族法の制定過程を見れば、自己決定できる領域が認められていたことが明らかである。ただし、ここに見られる自己決定の領域は、あくまで家族という親密な間柄にかかわる側面に限られた。では、ここに象徴される自己決定の範囲は、公私の区分をなくす政策においてはどのように扱われていたのだろうか。

本報告では、この問題に迫るために同志裁判所を取り上げる。同志裁判所は、国家の機能を社会へ移すための社会団体のひとつとされ、企業、学校、住宅管理部などに設置された。同志裁判所が扱うのは、労働規律違反や住民同士あるいは家族内のトラブルといった、比較的軽微な紛争である。この制度は、勤労者・住民自身の手による紛争解決を通じて彼ら自身を共産主義に適合するよう教育するものと位置づけられた。このように、同志裁判所は一般の人々にとって最も身近な場にあり、それだけに、日常生活に踏み込んでくる可能性があった。

同志裁判の調書等は同志裁判所構成員の任期と同じ期間、つまり1年間だけ保存され、その後は廃棄されるとの指摘があり、原本を探すのは困難と思われる。したがって、公刊された資料に紹介された事例を集めて分析する。分析の際には、扱われる問題によって対応が違うのか、違ふとすればそれはなぜかに関心を寄せる。また、同志裁判所がどのように運営されたか、公的機関がどの程度関わりを持ったのかについては、モスクワ市およびモスクワ州を中心に、公刊資料とアルヒーフ資料を基に分析する。この作業を通じて、人々の日常生活に国家ないし社会がいかなる形でかかわったかを描き出したい。

## (3) 松井康浩（九州大学）「後期ソヴィエト体制下を生きる市民の「主体性（agency）」—ライフストーリー文書を手がかりに—」

本報告は、フルシチョフ期以降の後期ソヴィエト体制下で、一般の知識人、市民が書き残した日記、手紙、自伝的回想録等のライフストーリー文書を手がかりに、当時の公共的課題や政治社会の動きに対して、またそれに関連して当局が国民に投げかけたメッセージや働きかけに対して市民がどのように応答し、いかなる形で「主体性（agency）」を発揮したのかを分析することで、「共産主義建設期」ソ連の国家・社会関係、公と私の関係について再考するものである。

本報告が取り上げるライフストーリー文書は次の2種類からなる。一つは、1932年にモスクワ教育大学に入学し、寮の部屋を共にした4人の女子学生が1935年からつけ始めた共同日記（collective diary）である。4人は1936年に大学を卒業した後、ロシア語・ロシア文学の教師としてモスクワ市及び近郊の学校にそれぞれ赴任したが、彼女たちの友人関係は途切れることなく続き、その他の友人、及び結婚後は夫や子供などの家族も加わって、日記への書き込みが続けられた（最後の記述は1992年。1937年末～1956年まで中断）。ここでは、膨大な分量に及ぶ記述の中から、フルシチョフ期のそれを分析する。この作業を通じて、スターリン批判後に一般の知識人の間でも政治論議が活発化したことを再確認できるが、本報告では、その議論の空間を「プロト公共圏（proto-public sphere）」というコンセプトで捉えたい。また、この日記には、そこに書き込みを行うメンバーが連名で当局に宛てた手紙の文面も含まれており、プロト公共圏と当局を媒介する「権力への手紙」にも光をあてる。

もう一つは、1970年代以降に執筆された一般の知識人や市民による自伝的回想録である。ここでは、1920年代にトロツキー反対派に属したため、1928年、36年、48年と3度の逮捕・ラゲリ送りを経験したA・S・ゾートフ（1902年－1993年）が1970年代後半以降に書き記した回想録、及び、自身の体験の映画化を夢見たE・G・キセリョーヴァ（1916年－1990年）が、同じく1970年代後半以降に執筆した回想録等、4人の人物の「作品」を概観する。本報告は、一般の知識人・市民による「自分史」執筆の営みが1970年代のソヴィエト社会で一定の広まりをみたのではないかと仮説に基づき、その原因や背景を探ることを通じて、市民の「主体性」問題や公と私の関係性について考えてみたい。

## 共通論題2「啓蒙と専制」

### (1) 橋本伸也（関西学院大学）「啓蒙と専制—ロシアにおける大学の社会文化史からの展開」

ロシア史を舞台に「啓蒙と専制」について論じる際に要請される論点として、まずはソヴィエト史学や哲学史・思想史が抱えた「啓蒙と専制」をめぐるアポリア、すなわちエカテリーナ二世がディドロらに示した親和的態度（発禁処分にあった『百科全書』をリーガで刊行継続するよう申し出たという）に端的に表現され、「啓蒙絶対主義」ないし「啓蒙専制君主」として概念化された、啓蒙と専制との結合を説明する際の困難にどう向き合うかがある。封建的諸関係を打倒したフランス革命を思想的に準備した急進的潮流として啓蒙思想を捉える正統的理解にとって、革命的思想の担い手たちが専制君主と取り結んだ友好的関係は、共約不能な二つの原理の同居という論理的処理の困難な、なんとも厄介な問題だったのである。この問題をめぐる最近の18世紀研究者による議論を紹介し、ロシアにおける「啓蒙と専制」をめぐる見直しの一端を紹介するのが、本報告の第一の狙いとなる。

ところで、「紀律化」概念が一般化しただけでなく、「文化論的転回」も経た後の近年の啓蒙研究や絶対主義研究では状況は一転している。すなわち、「啓蒙と専制」とのあいだには、かつて自明視された共約不可能性どころか、むしろ本質的連関が存在するとの理解が一般化しつつあるように思われるのである。そこにあるのは、フランスの場合のような啓蒙主義と革命的急進主義との結びつきを切断し、ドイツ諸領邦やハプスブルクに舞台を移した上で、専制君主の「ポリツァイ」のなかにも、都市文化の華やかな成長のなかにも、ともに18世紀的な啓蒙の契機が存在し、中東欧やロシアの絶対主義君主たちはまさに啓蒙のエージェントにほかならなかったという主張である。こうした啓蒙概念自体の転回は、近年のロシア文化史が盛んに取り上げる諸事象とも通底するであろう。

かかる啓蒙概念の見直しの一事例として取り上げるのが大学史である。エカテリーナ二世時代のロシア宮廷がフランス啓蒙主義者と取り結んだ親和的關係とはうらはらに、19世紀前半までのロシア大学史の主たる登場人物はドイツ人学者であって、正直なところ、両者間には一見して断絶が存在したかのようである。しかし、上述のような啓蒙概念自体の捉え直しを媒介させることによって、専制的ロシアが啓蒙とつながる幾重もの回路が浮き彫りになるだけでなく、従来孤立的に論じられてきたロシアの大学史をヨーロッパ大学史のなかに位置づけて論じることが可能になるのである。本報告が主たる目標とするのは、この論点である。

### (2) 鈴木直志（桐蔭横浜大学）「ドイツにおける「啓蒙」と「専制」—啓蒙絶対主義の歴史的位 置について」

本報告は、啓蒙絶対主義を構成する「啓蒙」と「専制」の属性それぞれに二つの論点を設けて、ドイツの啓蒙絶対主義を「どう見るか」について考察したものである。対象はプロイセンと帝国の中小領邦とし、前者の「啓蒙」については①君主の支配観、②教養層の台頭を、後者の「専制」については③啓蒙絶対主義的改革の実際、④一九世紀初頭の改革との連続性を検討する。四つの論点を要約すれば、それぞれ以下ようになる。

①君主の支配観の一部に啓蒙的要素が認められ、改革に前向きであれば、啓蒙君主の必要十分条件はすでに満たされる。啓蒙君主の典型とされるフリードリヒ大王の国家観については、啓蒙概念を緻密化し、少なくとも初期啓蒙と後期啓蒙を区別した上で考察すべきであり、一九世紀以降の近代的諸理念を基準にして、いたずらにこれを矛盾と見なすのは歴史的評価として不適切である。

②教養層の台頭は、それ以前には見られなかった重大な社会的変化であり、啓蒙絶対主義の社会史的背景をなしている。教養層は市民身分と貴族の双方から幅広く供給され、高級官僚に

代表される新しいエリートを形成した。その際、貴族を多数含む教養層が国家勤務者として統治に参加したことは、啓蒙絶対主義的改革政治のみならず、ドイツの近代社会全体に対しても独自の性格を与えた。

③啓蒙絶対主義の改革は、つねに部分的で、断片的なものにとどまったとはいえ、法の体系化と人道化、経済振興、寛容と教会統制、教育の整備、検閲の緩和といった領域で一定の業績を上げた。啓蒙と絶対主義は手を携えて改革を進め、国家権力の増大をもたらした。一七七〇年代以降に啓蒙が変質するにつれ、啓蒙と絶対主義は対立関係に変わっていった。改革政治は停滞し、一七八五年以降は閉塞状況に陥った。

④啓蒙絶対主義と一九世紀初頭の改革とのあいだには、フランス革命と神聖ローマ帝国の消滅という重大な断絶要素があるものの、人的にも、制度的にも、また理念の点でも強い連続性が認められる。それゆえドイツ史においては、一七八九年や一八〇六年を画期とするよりも、一七四〇年を一つの新しい時代の始期に位置づけるのが妥当である。ドイツにおける啓蒙絶対主義は、この新しい時代、すなわち中世的世界が終焉し近代世界へと移行する巨大な過渡期の出発点に位置しているのである。

### (3) 鳥山祐介(千葉大学)「18世紀末-19世紀初頭のロシアにおける風景表象の様式—視覚化される「啓蒙」と「専制」

18世紀末から19世紀初頭のロシアでは、庭園や風景の問題に大きな関心が寄せられ、詩や旅行記や社会時評など、様々なジャンルの言説に頻出するテーマとなった。これらは美学的見地から興味深いものであると同時に、「自然と人工」「自由と規律」「西欧の知とロシアという場」など様々な論点と結びつくことで同時代の政治的、社会的問題に対する書き手の姿勢を示すことがあったという点でも注目に値する。

18世紀以降のロシアが移入に努めた西欧の文化制度の中で、庭園は独特の位置を占めており、しばしば政治的隠喩としての機能を担った。例えば、ヴェルサイユの庭園を典型とする整形式庭園は英国においてブルボン家の「専制」と重ね合わされ、なだらかな草地を特徴とするブラウンの風景式庭園は保守派の論客によってピューリタン革命期の水平派に準えられた。ロシアでは、ドイツのヒルシュフェルトの庭園論などを媒介として1770-80年代より西欧の庭園言説の流入、再生産が始まり、特に18世紀末から19世紀初頭にかけて庭園を題材とする詩や散文、造園論が集中的に産み出される中で、数々の頌詩における帝室の庭園の礼賛や、カラムジンの小説『現代の騎士』(1803)における整形式庭園と啓蒙のアナロジーなどが示すように、庭園の隠喩的機能も広く知られるところとなった。また、庭園に対するラディカルな批判を含むゴールドスミス『廃村』の翻訳(1805)をジュコーフスキーが試みたことは、このテーマの多面性がロシアの知識人に認識されていたことを示すものである。

一方、庭園は、西欧における「美的対象としての自然の再発見」においても大きな役割を果たしたが、このプロセスと深く結びついていたのが「ピクチャレスク」という概念であった。風景を枠組に収めた上で既存のコードに従って読み解いていくこの思考様式はロシアにも浸透しており、カラムジン、イズマイロフ、マルティノフなどが残した国内外の旅行記にも頻繁に見出されるが、ロシアの風景と「ピクチャレスク」の結び付きに対する意識の表れ方は一様でない。

本報告では、庭園や風景表象をめぐるこれらの言説やその背景を整理するとともに、そこから窺うことのできる、「啓蒙」や「専制」といった諸論点に関する当時のロシアの知識人の認識についても考察の材料を提供する。

### 〈ロシア史研究会「50周年記念」の刊行について〉(文責：内田)

昨年度の総会で前委員会がロシア史研究会『50周年記念資料集』について提案し、議論をお願いしました。そこでは、基本的に刊行を是としつつも、①委員会提案は編集方針が後ろ向きで、将来に向かう姿勢がない、あるいは弱い、②若い世代の声を取り入れるべきである、③すでに掲載済みの論考ばかりで新味に欠けるなどの批判的意見が寄せられました。

そこで、今期委員会は以上の意見を踏まえ、コンセプトを『資料集』から『50年史』の性格に変更し、以下のタイトルと構成で「50周年記念」を発刊したいと考えます。

『日本におけるロシア史研究—ロシア史研究会の50年—』(仮)

第一部 ロシア史研究の過去と現在：座談会(この座談会をメインとするが、タイトルは未定)

<参考資料> 鳥山論文「日本におけるロシア史研究」(1959年)

塩川論文「日本におけるロシア史研究の50年」(2006年)

第二部 ロシア史研究会資料

(1)「ロシア史研究会会報」第1号、1956年9月

(2) 例会の記録、(3)『ロシア史研究』総目次

第三部 研究会関連年表、会員と役員一覧、人名索引など

(補足説明) 第一部の座談会は、創設期メンバー、団塊世代、50歳前後、40歳前後の4世代で行う。編集委員会を組織する。委員は団塊・50歳前後・40歳前後の3世代から、委員会メンバーに限らず広く募る。市販する。単行本として(予算上無理なら別冊でも可)、2011年発行をめざす。今年度の総会で改めてご議論願いますので、事前にご検討下さるようお願いいたします。

〈委員の交代と新委員紹介〉

例会担当委員は、都合で濱本真実会員から池田嘉郎会員に交代しました。

池田嘉郎(例会) ①所属 ②連絡先 ③専門分野 ④抱負 ⑤各担当事項に関する連絡

①東京理科大学理学部第一部

②162-8601 新宿区神楽坂1-3 東京理科大学理学部第一部教養学科

③第一次大戦からスターリン時代までの政治史

④90年代のロシア史研例会に回帰することを抱負とします。

⑤例会報告者・企画について、自薦他薦問わずお寄せください。

〈名簿係より〉前号(No, 78)に名簿アンケートを同封しました。すでに20件以上の訂正の連絡をいただきました。ご協力、ありがとうございます。締切は9月30日です。異動や転居をされた方、ご連絡よろしく願います。

連絡先メール・アドレス：[meiboteisei\(at\)yahoo.co.jp](mailto:meiboteisei(at)yahoo.co.jp) 野田岳人宛

〈事務局から〉大会プログラムと大会に関する情報はロシア史研究会のホームページ(<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jssrh/>)に掲載しています。また、共通論題・自由論題・パネルの報告者のフルペーパーをこのホームページからダウンロードできるようにする予定です。報告者には、9月15日までに事務局に送付するよう依頼しており、9月20日以降に掲載します。大会に関する新着の情報やプログラム等の修正・訂正については、上記のホームページにも随時掲載しますが、最新の情報は、ロシア史研究会のブログページ(<http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/p/jssrh/>)で最初にお知らせします。報告ペーパーの掲載・更新状況もこのブログページで確認できます。こちらにも必要に応じて参照してください。

初日の自由論題1の終了後に開催する総会にも是非ご参加ください。総会に出席できない方の中で、議決を議場の出席者に委任される場合は、後述の返信はがきに署名してお送り下さい。懇親会の参加費は、A会員が6,000円、B会員が4,000円の予定です。

今年も、両日ともに弁当など昼食の手配を事務局では行いません。16日(土)は学内の複数の学生食堂が営業しています。2日目は日曜日のため学内施設は営業していませんが、池袋駅の周辺に飲食店やテイクアウトできる店などがあるので、各自でご用意下さい。

返信用のはがきを同封しています。出席者数の把握と、欠席者については上記の委任の意思確認のためのものです。大会当日に配布する報告者のレジメの準備と、懇親会の準備のために、出席者の概数を把握する必要がありますので、出欠のご予定をお知らせください。事務局では、9月末までに出席予定者数を把握する必要がありますので、9月25日までに投函してください。よろしく願います。以上、大会の開催全般に関わることについてのお問い合わせは、事務局宛に願います。

本ニューズレターで新年度(2010/11年度)の会費の請求書と振替用紙を同封しました。

よろしく会費支払いをお願いします。

-----  
ロシア史研ニューズレター

第79号 2010年9月8日発行

編集・発行 ロシア史研究会委員会

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1  
東京外国語大学外国語学部  
鈴木義一研究室 気付

-----